はつくにしらすすめらみこと　　(2020 年)令和２年４月　藤代歴史愛好会　石山博

日本の歴史上、実は、崇神天皇（はつくにしらすすめらみこと）からが本当の歴史時代であって、それ以前は架空であると言われています。
神武天皇から９代は架空であるとされています。津田左右吉氏以来、現在の学説が大体そうです。

そのために、神武天皇などは、歴史としては扱わないとしています。
ところがその理由としてあげられているのが、２代から９代までの説話が、古事記・日本書紀に殆ど書かれていないことから、それが架空であった証拠であるとしています。

解説：崇神天皇（すじんてんのう、開化天皇 10 年 - 崇神天皇 68 年 12 月 5 日）は、日本の第 10 代天皇（在位：崇神天皇元年 1 月 13 日 – 同 68 年 12 月 5 日）。
実在した可能性のある最初の天皇である。
初代神武天皇とそれに次ぐ欠史八代の天皇達の実在性が希薄であることから、この崇神天皇をヤマト王権の初の天皇と考える説が存在し、また記紀に記された事績の類似と諡号の共通性から、神武天皇と同一人物とする説もある。井上光貞は御名に後世的な作為が窺えず、欠史八代と違って旧辞も備わっていることから、崇神を実在の可能性のある最初の天皇としている。出典: フリー百科事典『ウィキペディア』（終）

しかしこれは、おかしいのではないか。むしろ逆ではないか。と考えます。
なぜかというと古事記・日本書紀で、説話を造っているというのであれば、２代から９代までの説話くらい簡単に造れます。

説話が無いのは無かったからではなくて、むしろ逆に何らかの都合で削られたと考えてもいいのではないか。
もし神武から９代が、本当に架空であるとすれば、なんのために造られたのか。

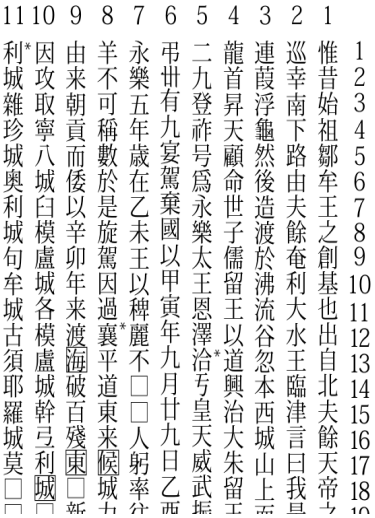
そして、崇神天皇は、御肇国天皇(はつくにしらすすめらみこと)とも言われています。
はじめて国をひらいた天皇とするには、それ以前の天皇の説話があったら、都合が悪いのではないか。
これは、実在したからではないか、むしろ実在の証拠ではないのか。と考えます。

ところで、崇神天皇については、有名な学説があります。
江上波夫氏が、提唱した騎馬民族征服説がそれです。

解説：きばみんぞく‐せつ【騎馬民族説】4〜5 世紀ごろ、アジア北東部の騎馬民族が朝鮮半島から日本に到来して北部九州・畿内を征服し、大和政権を樹立したとする説。
昭和 23 年（1948）江上波夫が提唱。・・デジタル大辞泉の解説　（終）

つまり高句麗にやってきて、高句麗民族にもなり、それが釜山近辺の任那にやってきて、御間城入彦五十瓊殖(みまきいりひこいにえ)と名乗った。
更に大和へ侵入・征服して天皇となった。ということになります。

しかし、この説は成り立ちにくいのではないかと思います。
なぜかと言いますと。
①まず、天皇の名前(みまきいりひこいにえ)の　任那の「みま」・城の「き」・入江の「いり」で、みんな日本語です。
もし騎馬民族・高句麗人であったら、本来高句麗語の名前があるはずです」。



事実、高句麗好太王碑の先頭は、鄒牟（すうぼう）王と言う名前から始まっています。（左記：碑第１面上部分）
我が大王の名前であるという事です。

読み下し（部分）：昔、始祖鄒牟王が、高句麗国家を創建する時、その源は、北扶余から出た。鄒牟王は天帝の子であり、母は河伯（水の神）の娘であった。卵を割って出てきたが、生まれながらにして聖徳があった。＜中略＞王は沸流谷忽本の西側山城に城を築き、都を創建した。
（全浩天氏の訳による）

こういう事から日本語の(みまきいりひこいにえ)ではなく高句麗語の名前が無くては、おかしいと思います。

②高句麗好太王碑が、五世紀の始め414年に出来ていますので、四世紀に騎馬民族が日本列島へ侵入したら、その事を書かない（書かれていない）事は、おかしいと思います。
そういう騎馬民族の一派なのに我々高句麗に、は向かう倭人は、けしからんと言うような議論が、無いとおかしいのに、まったくありません。
百済・新羅については、彼らは我々の分派なのに我々に、は向かっているのはけしからんという事を力説しているのに、倭人については、全く無いのです。

③もうひとつは、もし騎馬民族の高句麗人が、大和へ侵入して征服したとしたら、当然崇神天皇自身はもちろんですが、軍人や上級官僚は、みな高句麗人で、高句麗語を話していて、それで下部官僚や庶民が日本語を話すことになります。そう考えられます。

そうすると日本語に一大変革が、生じる事になります。つまり高句麗語を主として、日本語が少し残存しているような状態が、考えられます。
崇神天皇の時代に、そのような状況にならざるを得ないはずですが。
今の日本語は、どこを見ても（古事記・日本書紀・万葉集・風土記等を見ても）高句麗語が日本語の主体になっている。というような事は、見うけられません。

逆に縄文時代の日本語がそのまま現在に伝わっている状況が有ります。
例えば「山やま」は縄文・弥生も「やま」で、邪馬壹国（やまいちこく）、山彦（やまびこ）の「やま」もそうです。
また、地名や山や海のなまえに付く「ち・け・そ・くい・くま」も古い神（古層の神）といわれています。次に、神の名がついた例を示します。
「ち」ヤマタノオロチ、テナヅチ、アシナヅチ、オオナムチ、ミズチ、
「け」オバケ、モノノケ、ツボケ、ホトケ、ナバタケ、イタヅケ、ヨシタケ、
「そ」アソ（阿蘇）、キソ（木曽）、クマソ（熊襲）、イソ（磯）、コソ（社）、クソ、
「くい」大山咋、三島溝咋（ミゾクイ）、羽咋・名久井岳・福井・鯉喰（コイクイ）
「くま」神代（クマシロ）、熊本、球磨・千曲・阿武隈・熊毛・熊野、熊

解説：出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
ミズチ（ミツチ）の「ミ」は水に通じ、「ツ」（転訛後にズとなる）は連体修飾をつくる上代の格助詞で現代の格助詞「の」に相当し、「チ」は「大蛇（おろち）」の「チ」と同源である。 また「チ」は「霊力」などを意味する語尾と説明される。（終）

解説：精選版 日本国語大辞典の解説〖代名〗 対称。
クソ：相手に対し敬意や親愛の気持をこめていう。中古の語。
※宇津保（970‐999頃）藤原の君「おもしろきことのたまふくそたちかな」
※源氏（1001‐14頃）手習「いで、とのもりのくそ、あづま取りて」（終）

このように、高句麗語によって日本語が一大変革した「痕跡」が、確認できません。
したがって、この説は成り立ちにくいのではないかと思います。

ところで、(はつくにしらすすめらみこと)という名の天皇は、崇神天皇ともう一人神武天皇があげられます。この神武(天皇)という存在は、実在の天皇としないとどうも説明がつかないことが多くなってくると言われています。

例えば神武東遷説話（東征して即位して、王朝の初代王となった話）や天皇の代数についてもそうです。
古事記・日本書紀の天皇の代数は、基本そのとおりだと考えられます。

実際、考古学的には、特に紀元前２世紀頃から始まる九州への流入により、糸島・博多湾岸およびその周辺出土物の様相は一変し、「三種の神器」が出てくるのはそれ以後と云う状況（検証）もあります。
この九州への流入（侵略）を、記紀の天孫降臨説話と考える説があり、これは前述のとおり紀元前２世紀頃のことと考えられます。
これにより、もしその後の世代の、神武東遷が遷都だったのなら、そして天孫ニニギが初代であれば神武は４代目になるはずです。しかし神武が初代ということは、九州にはニニギ以下の王朝が存在したという事になります。

しかし、そうは言っても代数に対し古代の天皇の寿命には、疑問があります。
特に１代（神武天皇）から１６代（ 仁徳天皇）までの寿命が、「古代人の寿命」の平均と比べて、倍の長生きとなっています。

だからといって前述のように、神武天皇（即位）が、BC660 年になるとは、考古学的にも史書を見ても考えられません。
この原因と考えられるのは、下記の史書に
「その人寿考、あるいは百年、あるいは八、九十年」（倭人伝）
「その俗正歳四節を知らず、ただ春耕秋収を計して年紀となす」（魏略）

と記述されていることから、
①年２回歳をとる歴の数え方（方法：二倍年暦）を倭人は長生きだと倭人伝（陳寿）は理解したこと。
②更に日本書紀が、神功皇后を３世紀の卑弥呼・壱与にあてた事（後述）によって、日本書紀の天皇寿命を元にして遡った事が、原因だと考えられます。

解説：年紀「ねんき」デジタル大辞泉の解説・・年、年数、年代、年齢のこと。（終）
解説：二倍年暦：孔子の二倍年暦（部分）・・京都市　古賀達也
司馬遷の『史記』によれば、黄帝・堯・舜の年齢が百歳を越えていることから、夏王朝前後の中国は二倍年暦であったことがうかがえます。（中略）また、『論語』の二倍年暦についてはどうでしょうか。
「子曰く、後生畏る可し（こうせいおそるべし）。焉（いずく）んぞ来者の今に如（し）かざるを知らんや。四十五十にして聞ゆること無くんば、斯れ亦（これまた）畏るるに足らざるのみ。」（『論語』子罕第九）※新釈漢文大系『論語』、明治書院。吉田賢抗著。以下、『論語』の訳は同書による。

「後生畏る可し（こうせいおそるべし）」の出典として著名。四十歳五十歳になっても世に名が現れないような者は畏るるに足らないという意味であるが、孔子の時代（紀元前六～五世紀）より七百年も後の『三国志』の時代、そこに登場する人物で没年齢が記されている者の平均没年齢は約五十歳であり、多くは三十代四十代で亡くなっている。とされています。

従って、孔子の時代が『三国志』の時代よりも長命であったとは考えられず、とすれば四十歳五十歳という年齢は当時の人間の寿命の限界であり、その年齢で有名になっていなければ畏るるに足らないと言うのではときすでに遅しで、説話として無理があります。

従って、この四十歳五十歳という表記は二倍年暦によるものと考えざるを得ず、一倍年暦の二十歳二十五歳に相当する。これならば、名を為すに当時としては妥当な年齢であろうと考えられます。これにより現在の我々とは違って、半年で１歳、一年で２歳と数える二倍年歴で、表記されていると考えられます。（終）

　さて、古事記の伝承では、神武（天皇）は、今の福岡県糸島郡の近くから出発して、大阪湾で敗れ兄が戦死したので、熊野をまわって、大和へ侵入したということになっています。　そしてそこで勝利をおさめて、そこに居座った事が、書かれています。
以後９代まで大きな動きがありません。これは基本的にその通りだと思います。
大和から外へ出るのは、崇神天皇の御代となってからです。記紀ではそうなっています。

　これは九州の傍流の一分派がそのような行動をしたということになります。
神武紀には、「年十五にして、立ちて太子と為」った太子が九州(日向)から「東征」して大和の地を獲得し、「橿原宮に即帝位あまつひつぎしろし」したとしるし、即位の記事の直後に「初めて、天皇、天基を草創あまつひつぎはじめたまふ」と、この君がわが朝の初代君主たることを明示している。

　すなわちこの話は、王ならぬ太子(九州で王であったむねの記載が記紀ともにないことがに指摘されています。：古田武彦『盗まれた神話』)が東征して即位して一王朝の初代王となった話しなのであり、これを王の東遷(ないし遷都)の話と理解する説は、無理が有ります。
これにより前代(ウガヤフキアエズノミコト)は王でなかったと理解する外ありません。

　すなわちこの話は記紀ともに“九州の王家の傍流の子孫たる一人物が、大和に新領土を獲得し、別の一王朝をおこした”話にほかなりません。
　記紀の本文自体に、王朝の始原・初代王の出自という“肝心かなめ”の点につき、わが王朝は九州の王家(当然、神武東征の前後にわたって存続したことになる)の傍流に発する、と告げられています。

　もし神武東遷が遷都だったのなら、ニニギが初代であれば神武は４代目になるはず。
しかし神武が初代ということは、九州にはニニギ以下の王朝が存在したままだからです。
なお、日本書紀の方では宮崎県の方から侵入したということになっています。

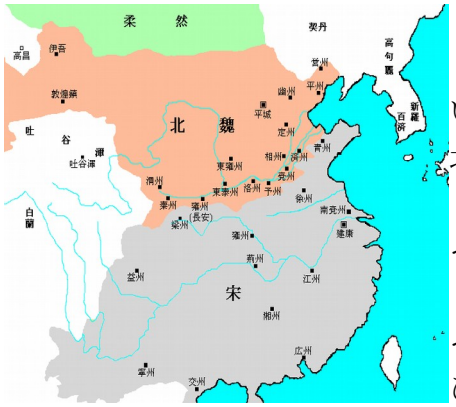
これによりその集団の１０代目が崇神です。
　崇神は父親の不倫の子供（祖父の何人かいる側室のなかの一人を父が、妻とした。
その子供が崇神ということで、書かれています。）という引け目を持っていて、それが釜山近辺の任那に住まわせられていた。

　その崇神が、逆に正当な血筋の兄や弟たちを倒したということが伝承として語られています。このような話は、後世でっち上げて、つくられる話ではないと思います。
　説話というものは、本来その人を立派にというか、活躍させ褒め称える役目を担うものです。そういう視点から見れば、その逆でむしろ本当の話なのだと思います。
　しかし２代～９代は、ちょうど倭人伝の卑弥呼と壱与の時代にだぶっていて大事ですが、伝承の中から省かれています。

もう一つ省かれているのが、古事記の序文に有名な（天武天皇の）言葉がありまして、「削僞定實：偽りを除いて実を定める。」と古事記編纂の目的として、書いてあります。

これを従来の説は、各豪族が持っていた歴史書（旧辞など）の部分的な訂正（正誤表を作るような、子供が３人を２人だったとか部分の修正）と考えていました。

しかし、ここで偽りと言っているのは、中国の南朝の系列が偽りと言っているのではないのか。そして北朝の系列が実で、正しいと言っているのではないか。と考えます。



中国は、過去、南北朝に分かれています。
いわゆる鮮卑が南下してきて洛陽や長安を占拠して、華北を統一し、五胡十六国時代を終焉させ、北魏(439)をつくり、南北朝時代が始まります。
その子孫が、唐・宋になっています。

それに対して南朝は、三国志の魏(220)・西晋(265)が滅びて、東晋(317)というのが南京を主にする国です。
その後、宋(420)・斉(479)・梁(502)・陳(557)と南朝が続いて、倭の五王などと関係をもつことになります。そして、陳が随に征服されて滅びます。(589)随の中国統一です。

ですから７世紀になったら「南朝は偽りの王朝だ」と云う立場に北朝の随や唐は立つわけです。それが７世紀の状態ですから、それに対応して日本の場合も南朝との関わりは偽りである。

「北朝との関係だけが実である」。とう云う立場に立ってやり直さなければいけない。
と天武天皇がおっしゃったという事を古事記では理由にして、全部カットしてある。
だから南朝との関わるは全部カットしてあります。
「倭の五王との関係も卑弥呼との関係も全部カット」して、古事記は扱っていません。

そして日本書紀は、卑弥呼と壱与の二人を一人の神功皇后に結びつけてかいてあります。
二人が一人であるということは有りえませんが、東アジアに知られている卑弥呼と壱与の二人との対応をつけようとしているのが、日本書紀ということになります。
ですから必然的に神功皇后は、３世紀の人となってしまいます。

更に大事なことを申しますと、『隋書倭国伝』にある「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや」と言ったのは、多利思比孤で、古事記・日本書紀には書いてありません。多利思比孤は男性で、キミという妻がいると書いてあります。

一方古事記・日本書紀の方では、７世紀前半の権力者は、推古天皇です。
これも有名な女性です。聖徳太子は摂政であって天皇ではありません。

この事例を明治以後は、「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや」と推古天皇が言ったと教科書などに記載してあります。
江戸時代の本居宣長の手法です。明治以降もそのようにしたということになります。

つまり、『隋書倭国伝』にある「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙なきや」と言ったのは、九州で天子と称した多利思比孤であり、同時代に近畿には、推古天皇がいたということになります。

つまりこの時点で、近畿と九州（近畿から遠国と呼ばれた）に、王国があった事になります。これに伴い、２つの王国の間は中国といわれ、今の中国地方だと云われています。

更に、旧唐書の日本国伝によりますと、東と北の境は大きな山（鈴鹿山脈等）が、あって山の向こうは、毛人の国だと書いてあります。
日本国は、近畿と考えると表現描写が合っています。
つまりこれより山の向こうは、別の国（外国）だったと書かれていることになります。
（了）

解説：系譜
ニニギ、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）は日本神話の神。地神五代の三代目。日向三代の初代。：出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

解説：古事記序文（部分）：　於是天皇詔之　朕聞　諸家之所モタル[]帝紀及本辭　既違正實　多加虚僞　當今之時不改其失　未經幾年其旨欲滅　斯乃　邦家之經緯　王化之鴻基焉　故惟　撰録帝紀　討覈舊辭　削僞定實　欲流後葉

　そこで天皇がこのように仰せになりました。「私の聞くところによれば、諸氏族に伝わっている帝紀および本辞には、すでに真実と違い、虚偽を加えたものがはなはだ多いとのことである。そうだとすると、今この時に、その誤りを改めておかないと、今後幾年もたたないうちに、その本旨は失われてしまうだろう。この帝紀と本辞は、国家組織の原理を示すものであり、天皇政治の基本となるものである。それ故、正しい帝紀を撰んで記し、旧辞をよく検討して、偽りを削除し、正しいものを定めて、後世に伝えようと思う」と仰せになりました。（終）

解説：隋書倭國傳（部分）：大業三年、其王多利思比孤遣使朝貢。使者曰：「聞海西菩薩天子重興佛法、故遣朝拜、兼沙門數十人來學佛法。」其國書曰「日出處天子致書日沒處天子無恙」云云。帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰：「蠻夷書有無禮者、勿復以聞。」

　大業三年（607 年）、その王の多利思比孤が遣使を以て朝貢。
　使者が曰く「海西の菩薩天子、重ねて仏法を興すと聞き、故に遣わして朝拝させ、兼ねて沙門数十人を仏法の修学に来させた」。
　その国書に曰く「日出ずる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや」云々。帝はこれを見て悦ばず。鴻臚卿が曰く「蛮夷の書に無礼あり。再び聞くことなかれ」と。（終）

解説：『旧唐書くとうじょ』倭国伝・日本国伝　読み下し文（部分）
倭国
倭国はいにしえの倭奴国のことである。唐の都の長安を去ること１万４千里。新羅の東南の大海の中にある。倭人は山ばかりの島に依り付いて住んでいる。倭国の広さは東西は５か月の旅程で、南北は３か月の旅程であり、代々中国と通じていた。その国の町などには城郭が無く、木で柵を作り、家の屋根は草で葺いている。四方の小島五十余国は皆、倭国に属していた。倭国の王の姓は阿毎（あま・あめ）氏で、一大率を諸国において検察させている。小島の諸国はこれを畏怖している。制定する官位は１２等級ある。訴訟する者は匍匐（ほふく）して前に出る。倭国には女が多く、男は少ない。かなりの漢字が通用している。俗人は仏法を敬っている。人々は裸足で、ひと幅の布で身体の前後を覆っている。

貴人は錦織の帽子をかぶり、一般人は椎髷（さいづちのようなマゲ）で、冠や帯は付けていない。婦人は単色のスカートに丈の長い襦袢を着て、髪の毛は後ろで束ねて、２５センチほどの銀の花を左右に数枝ずつ挿して、その数で貴賤が分かるようにしている。衣服の制（つくり）は新羅にとても似ている。
貞観５年（631）。倭国は使いを送って来て、地方の産物を献上した。
太宗は道のりが遠いのをあわれんで、所司（＝役人）に命じて毎年朝貢しなくてよいよう

に取りはからわせ、さらに新州の刺史（しし＝長官）高表仁に使者のしるしを持たせて倭国に派遣して、てなずけることにした。ところが表仁には外交手腕がなく、倭国の王子と礼儀の事で争いを起こして、国書を述べずに帰国した。
貞観22年（648）になって、倭国王は再び新羅の遣唐使に上表文をことづけて太祖へ安否を伺うあいさつをしてきた。

日本国
日本国は倭国の別種である。その国は日の昇る方にあるので、「日本」という名前をつけている。あるいは「倭国がみずからその名前が優雅でないのを嫌がって、改めて日本とつけた。」ともいう。またあるいは「日本は古くは小国だったが、倭国の地を併合した。」とも。その日本人で唐に入朝する使者の多くは尊大で、誠実に答えない。それで中国ではこれを疑っている。
彼らは「我が国の国境は東西南北、それぞれ数千里あって西や南の境はみな大海に接している。
東や北の境は大きな山があってそれを境としている。山の向こうは毛人の国である。」と言っている。
長安3年（703）、その大臣の粟田真人が来朝して国の特産物を献上した。朝臣真人の身分は中国の戸部尚書（租庸内務をつかさどる長官）のようなものだ。彼は進徳冠をかぶって、その頂は花のように分かれて四方に垂れている。
（進徳冠…唐の制度の冠の一つで九つの球と金飾りがついている）紫の衣を身に付けて白絹を腰帯にしていた。
真人は経書や史書を読むのが好きで、文章を創る事ができ、ものごしは温雅だ。則天武后は真人を鱗徳殿の宴に招いて司膳卿（しぜんけい・食膳を司る官）を授けて、本国に帰還させた。
開元の初め（玄宗の時代・713～741）また使者が来朝してきた。その使者は儒学者に経典を教授してほしいと請願した。玄宗皇帝は四門助教（教育機関の副教官）の趙玄黙に命じて鴻盧寺で教授させた。日本の使者は玄黙に広幅の布を贈って、入門の謝礼とした。その布には「白亀元年の調布（税金として納めたもの）」と書かれているが、中国では偽りでないかと疑った。

日本の使者は唐でもらった贈り物を全部、書籍を購入する費用に充てて、海路で帰還していった。
その副使の朝臣仲満（阿倍仲麻呂）は中国の風習を慕って留まって去らず、姓名を朝衡（ちょうこう）と変えて朝廷に仕え、左補闕（さほけつ・天子への諫言役）、儀王（第１２王子）の学友となった。朝衡（仲麻呂）は京師に50年留まって書籍を愛好し、職を解いて帰国させようとしたが、留まって帰らなかった。
天宝12年（753）。日本国はふたたび使者を送って朝貢してきた。（※藤原清河・大伴古麻呂・吉備真備ら）上元年間（760～762）に朝衡を左散騎常侍（天子の顧問）・鎮南都護（インドシナ半島北部の軍政長官）に抜擢した。
貞元20年（804）。日本国は使者を送って朝貢してきた。学生の橘逸勢（はやなり）・学

問僧の空海が留まった。
元和元年（806）。日本国使判官の高階真人は「前回渡唐した学生の学業もほぼ終えたので帰国させようと思います。わたくしと共に帰国するように請願します。」と上奏したのでその通りにさせた。
開成4年（839）。日本国は再び使者を送って朝貢してきた。

解説：開化天皇（かいかてんのう、孝元天皇7年 - 開化天皇60年4月9日）は、日本の第9代天皇（在位：孝元天皇57年11月12日 – 開化天皇60年4月9日）。
欠史八代の一人で実在性に乏しい。孝元天皇の第二皇子。母は皇后で欝色雄命（内色許男命、穂積臣遠祖）の妹の欝色謎命（うつしこめのみこと、内色許売命）[1]。同母兄弟には大彦命・少彦男心命・倭迹迹姫命、異母兄弟には彦太忍信命・武埴安彦命がいる。16才で皇太子となる。
父帝が崩御した同じ年の11月に即位。翌年、春日の率川宮に都を移す。以前の都とは大きく離れた大和盆地の北に位置している。即位6年、孝元天皇の妃（側室）だった伊香色謎命を皇后として御間城尊（後の崇神天皇）らを得た。また丹波竹野媛、和珥臣の祖の姥津命の妹の姥津媛を妃にしている。姥津媛との間には狭穂彦命、狭穂姫命、日葉酢媛命、神功皇后の祖となる彦坐王を得た。即位60年、崩御。出典: 『ウィキペディア』

解説：つだ‐そうきち〔‐サウキチ〕【津田左右吉】［1873〜1961］歴史学者。岐阜の生まれ。文献批判に基づき、記紀の神話が客観的史実でないことを論証し、日本古代史の科学的研究を開拓した。のち、この上代研究が右翼思想家から告発され、昭和15年（1940）代表著作4点が発禁、ついで出版法違反で起訴され、早大教授を辞職した。著「神代史の研究」「古事記及日本書紀の研究」など。・・デジタル大辞泉の解説

解説：神武天皇【じんむてんのう】《日本書紀》での建国の天皇。和風諡号(しごう)は神日本磐余彦(かむやまといわれひこ)天皇。天孫瓊瓊杵(ににぎ)尊の曾孫とされ，日向(ひゅうが)から東征して大和(やまと)に入り，橿原(かしはら)宮を営んで即位したというが，もとより史実ではない。〈はつくにしらすすめらみこと〉という称号が崇神(すじん)天皇と共通するので，その投影とみる説もある。・・百科事典マイペディアの解説

解説：欠史八代（けっしはちだい、かつては闕史八代または缺史八代とも書いた）とは、『古事記』・『日本書紀』において系譜（帝紀）は存在するがその事績（旧辞）が記されない第2代綏靖天皇(すいぜいてんのう)から第9代開化天皇までの8人の天皇のこと、あるいはその時代を指す。現代の歴史学ではこれらの天皇達は実在せず後世になって創作された存在と考える見解が有力であるが、実在説も根強い。出典: 『ウィキペディア』

解説：こうかいどおうひ【広開土王碑】
広開土王の功業を記念して子の長寿王によって414年に建てられた碑。中国の吉林省の鴨緑江中流北岸にある。古代の日朝関係を語る重要な史料。表面が磨耗し、解釈をめぐる論争がある。好太王碑。・・大辞林 第三版の解説

解説：卑弥呼 - Wikipedia
卑弥呼（ひみこ、生年不明 - 242年〜248年）は、『魏志倭人伝』等の中華の史書に記されている倭国の王（女王）。邪馬台国に都をおいていたとされる。 ... 倭女王卑弥呼与狗奴国王卑弥弓呼素不和 遣倭載斯烏越等詣郡 説相攻撃状 遣塞曹掾史張政等因齎詔書黄幢 拝仮難升米為檄告諭之 卑弥呼 ... しかし『日本書紀』の「神功皇后紀」においては、「魏志倭人伝」の中の卑弥呼に関する記事を引用しており、卑弥呼と神功皇后が同時代の …

解説：台与 - Wikipedia
臺與（「とよ」あるいは「いよ」、生没年不詳）は、日本の弥生時代3世紀に『三国志(歴史書)』、魏志倭人伝中の邪馬台国を都とした倭の女王卑弥呼の宗女にして、卑弥呼の跡を13歳で継いだとされる女性である。魏志倭人伝中では「壹與」であるが、後代の書である『梁書倭国伝』『北史倭国伝』では「臺與」と記述されている。 ... 日本書紀』の神功紀に引用される『晋起居注』（現存しない）に泰初（「泰始」の誤り）2年（266年）に、倭の女王の使者が朝貢したとの記述がある。..
解説：北魏　　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
北魏（ほくぎ、拼音: Běi Wèi、386年 - 534年）は、中国の南北朝時代に鮮卑族の拓跋氏によって建てられた国。前秦崩壊後に独立し華北を統一して、五胡十六国時代を終焉させた。
国号は魏だが、戦国時代の魏や三国時代の魏などと区別するため、通常はこの拓跋氏の魏を北魏と呼んでいる。また三国時代の魏は曹氏が建てたことからこれを曹魏と呼ぶのに対して、拓跋氏の魏はその漢風姓である元氏からとって元魏（げんぎ）と呼ぶこともある（広義には東魏と西魏もこれに含まれる）。さらに国号の由来から、曹魏のことを前魏、元魏のことを後魏（こうぎ）と呼ぶこともある。

解説：東晋　　出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）
東晋（とうしん、拼音: Dōngjìn）は、中国の西晋王朝が劉淵の漢（前趙）より滅ぼされた後に、西晋の皇族であった司馬睿によって江南に建てられた王朝である（317年 – 420年）。西晋に対し史書では東晋と呼んで区別するが、また西晋と併せて晋と総称される。

解説：らくよう【洛陽】　大辞林 第三版の解説
① 中国、河南省北部の都市。周代の洛邑らくゆうに始まり、漢代に洛陽と改称され、後漢・魏ぎ・西晋・北魏などの都として栄えた。隋・唐代は西の長安に対し、東都とよばれた。付近に白馬寺・竜門石窟など古跡が多い。ルオヤン。
② 平安京の左京の称。右京を長安と称するのに対する。また、京都の異称。

解説：ちょうあん〔チヤウアン〕【長安】　デジタル大辞泉の解説
中国、陝西(せんせい)省にある旧都。現在の西安市付近。前漢以降の諸王朝の都とされたが、唐代に最も繁栄し、人口100万人を数えた。洛陽に対して、西都・上都ともよばれた。

解説：神功皇后 - Wikipedia　（じんぐうこうごう、成務天皇40年 - 神功皇后69年4月17日）は、日本の第14代天皇である仲哀天皇の、皇后。
初めての摂政（在位:神功皇后元年10月2日 - 神功皇后69年4月17日）とされた。 さらに明治時代までは一部史書で第15代天皇、初の女帝（女性天皇）とされたが[1]、大正15(1926)年の皇統譜令（大正15年皇室令第6号）に基づく皇統譜より正式に歴代天皇から外された[2]。 『日本書紀』では仲哀天皇崩御から応神天皇即位まで約70年間ヤマト王権に君臨したとするが、その約70年間は天皇不在ということになる。

解説：推古天皇 - Wikipedia　　推古天皇（すいこてんのう、554年5月21日〈欽明天皇15年乙巳朔癸丑： 4月9日〉- 628年4月15日〈推古天皇36年3月7日〉）は、日本の第33代天皇（在位:593年1月15日〈崇峻天皇5年12月8日〉 - 628年4月15日〈推古天皇36年3月7日〉）。 在位期間は36年

高句麗語同系説
（「高句麗語#日本語との関係」も参照）- Wikipedia
朝鮮の歴史書「三国史記」に記された高句麗の故地名の音訓併用表記から推測される、いわゆる「高句麗語」が、日本語と組織的に顕著な類似性を示す事を初めて指摘したのは、新村出である（1916年）。新村は、「三」「五」「七」「十」の4つの数詞が日本語と類似することなどを指摘したが、日本語アルタイ起源説と関連させてこの類似を更に深く追究したのは、李基文（イ・ギムン）（朝鮮語版）（1961年-1967年）、村山七郎（1961-1963年）である。最新の論考には板橋義三のものがある（2003年）が、どのような語彙を抽出し、どのような音価を当てるかは論者によって異なる。更に、抽出された語彙の解釈については大きな見解の相違がある。例えば、金芳漢（1985年）は、語彙数を80語とし、ツングース系と解釈されるものは10数語を超えないとするのに対し、板橋は111語を抽出してツングース系語彙は21語とする。また、マズール[19]や村山七郎の説（1979年）を継承してオーストロネシア起源の語彙が含まれるとする。
いずれにしても、数詞に加え、「口（古次）」「海（波且）」「深（伏）」「白（尸臘）」「兎（烏斯含）」「猪（烏）」「谷（旦）」などの類似は印象的であり、更に興味深いのは、中期朝鮮語よりも上代日本語との方が、類似語が見出される割合が大きい（板橋によれば30%と42%）事である。
ただし古代朝鮮半島から旧南満州における言語分布状況がどのようなものだったかは不明な点が多い。そもそも再構された「高句麗語」が、本当に高句麗の言語だったかについても疑問がある。「魏志東夷伝」や「後漢書」などから推測すると、3世紀後半に鴨緑江以北を本拠地としていた夫余・高句麗の言語がツングース系だった可能性は高いが（村山説: 1979年）、肝心の朝鮮半島北部から中部にかけて、3世紀当時どのような言語が分布していたかについては、「魏志東夷伝」などの「中国史書」には全く言及がないのである（金芳漢: 1985年）。「高句麗語」と日本語との系統関係についてもいまだ十分に実証されていない。

日本語との関係
再構された高句麗語語彙と周辺言語との比較の結果、高句麗語は中期朝鮮語よりも上代日本語との方が、類似語が見出される割合が大きいという研究がある。資料がほとんど残っていない高句麗語の復元については、『三国史記』の巻 37 にある高句麗の地名の表記（下記の表を参照）が手がかりとされているが、それによれば、例えば「三」をミツ、「七」をナノン、「五」をウィツ、「兎」をウサグム、「鉛」をナマリ、「谷」をタンと発音していた[3]。高句麗語で判明している数詞４つすべてにおいて日本語との間で一定の音韻的共通性が認められるとして、日本語の起源として考える研究者も存在する。
ただし、「魏志東夷伝」などの「中国史書」に言及がないことから、3 世紀当時の朝鮮半島北部から中部にかけて、どのような言語が分布していたのかについては不明であり、再構された「高句麗語」が、本当に高句麗の言語だったのかについては実証はされていない（金芳漢: 1985 年）。 岡田英弘は、檀石槐が倭人国を襲ったとの逸話[4]に基づき、この地域に入植した倭人の言語に由来するものであろうとしている[5]。

解説：天皇の寿命（日本書紀） 表　歴代天皇の在位と寿命　〇寿命８０才以上

	代	天皇御号	寿命
〇	1	神武天皇	126(127)
〇	2	綏靖天皇	83(84)
	3	安寧天皇	66(57)
	4	懿徳天皇	76(76)
〇	5	孝昭天皇	113(113)
〇	6	考安天皇	136（１３６）
〇	7	孝霊天皇	127（１２７）
〇	8	孝元天皇	114（１１４）
〇	9	開化天皇	110（１１０）
〇	10	崇神天皇	118（１２０）
〇	11	垂仁天皇	139（１４０）
〇	12	景行天皇	143（１０６）
〇	13	成務天皇	106（１０７）
	14	仲哀天皇	?　（５２）
〇	15	応神天皇	110（１１０）
〇	16	仁徳天皇	142

「古代人の寿命」
縄文人の場合は、３０才くらいと考えられています。これは、貝塚から発掘される骨から確定できるといわれます。しかし、弥生時代の人骨は発掘されること自体大変少なく、弥生人の骨は土に帰ってしまうといわれます。

縄文人は、貝塚の近くに骨を埋葬しました。カルシウム分の多い土に埋葬された骨は、土に帰らず残るといわれます。一方、弥生時代は稲作が始まっています。貝塚のようにカル

シウム分の多い土には埋葬されなかったので、弥生人の骨は土に帰ってしまったのです。佐賀県の吉野ヶ里遺跡は有名ですが、発掘された人骨によると、弥生人は渡来系らしい特徴を備えているといわれます。縄文人に比べると背が高く、平均寿命は30～40歳ぐらい。遺物には紐のついた毛髪もあり、髪を結っていたこともわかります。（ここでいう３０歳は、１５歳以上生存した人間の寿命です。）
弥生時代は、稲作が生活の基盤となり、鉄器や青銅器の使用が始まった時代といわれます。吉野ヶ里でも農耕によって飛躍的に人口が増加し、人々を統率する王も現れました。一般の墓地とは別に王族を祀る巨大な墳墓がそれを物語っています。
古代は幼児期の死亡率が高く、縄文時代～弥生時代の死亡率は５０～６０％という数字も見えます。大正末期に幼児期死亡率が、１５％以上あったといわれますので、大袈裟な数字ではないかと思います。

１５歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷は、人口問題研究家の小林和正氏による
縄文時代：男３１．１歳／女３１．３歳
弥生時代：男３０．０歳／女２９．２歳
古墳時代：男３０．５歳／女３４．５歳
室町時代：男３５．８歳／女３６．７歳
江戸時代：男４３．９歳／女４０．９歳

（古人骨より推定）
1891～98年調査：男５５．７歳／女５７．１歳
1965～66年調査：男７０．３歳／女７５．０歳

（人口統計）
ちなみに、"平均寿命"とは、「０歳児における平均余命(後どれくらい生きられるか)」ですが、紀元前１１世紀～１世紀「縄文時代」の日本人の寿命は、男女とも、１４．６歳。紀元前８世紀～３世紀「弥生時代」３世紀～７世紀「古墳時代」に入っても、「縄文時代」と、ほとんど平均寿命は変わらず、「室町時代」(1338-1573)では１５．２歳くらいと推定されています。

解説：二倍年暦について
古賀達也

古代日本列島において、倭人は一年を二つに分けて二年とする暦法、即ち「二倍年暦」を使用していたことが、古田武彦氏により明らかにされた。(1) それは魏志倭人伝と魏略の次の記述から導き出されたものだ。
「その人寿考、あるいは百年、あるいは八、九十年」（倭人伝）
「その俗正歳四節を知らず、ただ春耕秋収を計して年紀となす」（魏略）

倭人伝に記された倭人の年齢、「百歳あるいは八、九十歳」を従来の論者は「誇張」として退け、真面目に取り扱ってこなかったのであるが、古田氏『『魏略』の倭人記事は一年を春と秋とで区切る、二倍年暦を指し示したものであり、従って倭人の年令は五十歳、あるいは四十～四五歳と理解できるとされた。

一方、『三国志』に死亡時の年齢が書かれている九十名（全三百三十二名の二十七%）について、その年齢を調査した結果、平均は五十二・五歳であり、このうち、とくに高齢者であるため記載された例をのぞくと、その没年齢は三十代と四十代が頂点となっていることを明らかにされた。

これらの年齢に比べると倭人は「約二倍の長寿」となっていることからも、倭人の年齢が二倍年暦によっていることを、実証的に論証されたのであった。

この二倍年暦の発見により、『古事記』『日本書紀』の天皇の寿命が平均九十歳くらいである点も、リーズナブルな理解が可能となること(2)、また浦島太郎の伝説（丹後風土記）が六倍年暦で書かれていること、聖書の『創世記』には、一四倍年暦（アダムの系図）、十二倍年暦（セムの系図）や二倍年暦による記載があることなども指摘され、これらを多倍年暦と名づけられた。(3) 更には二倍年暦の淵源がパラオ諸島を含む太平洋領域であったとする仮説へと展開されたのである。(4)

孔子の二倍年暦 (京都市　古賀達也)

『管子』の二倍年暦

司馬遷の『史記』によれば、黄帝・堯・舜の年齢が百歳を越えていることから、夏王朝前後の中国は二倍年暦であったことがうかがえる。他方、『三国志』では一倍年暦で記されているにもかかわらず、その倭人伝においては二倍年暦による倭人の高齢（八十～百歳）が何の説明もなく記されていることから、この時代既に二倍年暦という概念が中国では失われているように思われる。

管見によれば、『管子』に次のような二倍年暦と考えざるを得ない記事があることから、周代の春秋時代は二倍年暦が続いていたと考えられる。

「召忽曰く『百歳の後、わが君、世を卜る。わが君命を犯して、わが立つところを廃し、わが糺を奪うや、天下を得といえども、われ生きざるなり。いわんやわれに斉国の政を与うるをや。君命をうけて改めず、立つるところを奉じて済さざるは、これわが義なり』。」（『管子』大匡編）

※訳は中国の思想第８巻『管子』（徳間書店、松本一男訳）による。

斉国の王子、糺の養育係だった召忽が臣下の忠誠心のあり方について述べた件である。王子が百年後に死んだら自らも殉死すると主張しているのだが、ここでの百歳は二倍年暦と考えざるを得ない。当時の人間の寿命を考えれば、たとえ王子が幼年であったとしても百年後に世をさるというのは現実離れしていて、表現として不適当である。やはり、この百歳は二倍年暦であり、一倍年暦の五十歳と見るほかないのではあるまいか。それであれば、人間の寿命としてリーズナブルである。

『列子』の二倍年暦

同じく周代の戦国時代における二倍年暦の例として、『列子』に多くの記事が見える。

1)「人生れて日月を見ざる有り、襁褓を免れざる者あり。吾既に已に行年九十なり。是れ三楽なり。」（『列子』「天瑞第一」第七章）
【通釈】同じ人間と生まれても、日の目も見ずに終わるものもあり、幼少のうちになくなるものもある。それなのに、自分はもう九十にもなる。これが三番目の楽しみである。
2)「林類年且に百歳ならんとす。」（『列子』「天瑞第一」第八章）
【通釈】林類という男は、年がちょうど百にもなろうという老人である。
3)「穆王幾に神人ならんや。能く當身の楽しみを窮むるも、猶ほ百年にして乃ち徂けり。世以て登假と為す。」（『列子』「周穆王第三」第一章）
【通釈】思うに、穆王とても神ではない。一身の楽しみは皆やり抜いたが、やはり百年もすればこの世を去ってしまったのである。世間ではこれを遠く天に上ったと言っている。
4)「役夫曰く、人生百年、昼夜各々分す。吾昼は僕虜たり、苦は則ち苦なり。夜は人君たり、其の楽しみ比無し。何の怨む所あらんや、と。」（『列子』「周穆王第三」第八章）
【通釈】この下僕がいうには、「人の一生の内、半分は昼であるが、半分は夜である。自分は昼の間は人のために働く下僕の身で、確かに苦しいには相違ない。けれども夜は人の上に立つ君主であって、その楽しみは比べるものとてない。してみれば、何も恨みに思うことなどありませんよ」とのことであった。
5)「太形（行）・王屋の二山は、方七百里、高さ萬仞。本冀州の南、河陽の北に在り。北山愚公といふ者あり。年且に九十ならんとす。」（『列子』「湯問第五」第二章）
【通釈】太行山・王屋山の二つの山は、七百里四方で、高さが一万尋もある。もとも冀州の南、河陽の北のあたりにあった山である。ところが北山愚公という人がいて、もう九十歳にもなろうという年であった。
6)「百年にして死し、夭せず病まず。」（『列子』「湯問第五」第五章）
【通釈】百歳まで生きてから死ぬのであって、若死にや病死といったこともない。
7)「楊朱曰く、百年は壽の大齊にして、百年を得る者は、千に一無し。設し一有りとするも、孩抱より以て?老に逮ぶまで、幾んど其の半に居る。」（『列子』「楊朱第七」第二章）
【通釈】楊子がいうには、百歳は人間の寿命の最大限であって、百歳まで生き得た人間は、千人に一人もない。若し千人に一人あったとしても、その人の赤ん坊の時期と老いさらばえた時期とが、ほとんどその半分を占めてしまっている。
8)「然り而して萬物は齊しく生じて齊しく死し、齊しく賢にして齊しく愚、齊しく貴くして齊しく賤し。十年も亦死し、百年も亦死す。仁聖も亦死し、凶愚も亦死す。」（『列子』「楊朱第七」第三章）
【通釈】それと同時に、すべての物は、一様に生存するようになった半面、一様に必ず死ぬ運命にあるもので、一様に利口である半面、一様に馬鹿なところがあり、一様に尊いところのある半面、一様に卑しいところもあって、一方的にばかりではあり得ない。たとえ十年で死のうと、百年で死のうとも。

9)「百年も猶ほ其の多きを厭ふ。況んや久しく生くることの苦しきをや、と。」（『列子』「楊朱第七」第十章）
【通釈】百年の寿命でさえ、長過ぎると思っているのだ。まして、いつまでも生き長らえて苦しみを重ねるなどということは、いらぬことだ。
※訳・通釈とも新釈漢文大系『列子』（明治書院、小林信昭著）によった。

以上のように、『列子』には随所に百歳や九十歳という二倍年暦と考えざるを得ない年齢表記が見えるのである。『列子』は戦国時代末期以降の成立と考えられているが（注１）、収録された説話には、例えば1),2) は孔子の説話として紹介され、3)は周の第五代天子である穆王の説話として記されている。従って、先に紹介した『管子』の記事と併せて考えれば、周代においては二倍年暦が採用されていたこととなろう。したがってこの時代、人間の寿命は百歳まで、すなわち一倍年暦での五十歳と考えられていたことが『列子』よりわかるのであるが、「人間五十年下天のうちに」と、織田信長が好んで謡ったとされる「敦盛」の詞にも対応していて興味深い。

ちなみに、5)に見える「方七百里」は漢代の長里（一里訳五〇〇メートル）ではなく周代の短里（一里訳七七メートル）と考えざるを得ないことから、『列子』の成立は周代かそれを多くは下らない時期とするべきであろう。とは言え、『列子』「力命第六」第一章では、孔子の愛弟子顔淵（回）の没年齢が十八とされており、これは一倍年暦による年齢表記と思われる。この点、後述するが、『列子』成立過程や二倍年暦から一倍年暦への移行期の問題にもかかわる興味深い史料状況と言えるのではあるまいか。

『論語』の二倍年暦

春秋時代の覇者、斉の宰相だった管子（管仲、紀元前七世紀）と、戦国時代初期とされる列子（列禦寇）が共に二倍年暦を用いていたとすれば、ちょうどその間に位置する孔子もまた二倍年暦の時代に生きたこととなるが、『論語』にもその痕跡が散見される。次の通りだ。

「子曰く、後生畏る可し。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや。四十五十にして聞ゆること無くんば、斯れ亦畏るるに足らざるのみ。」（『論語』子罕第九）※新釈漢文大系『論語』、明治書院。吉田賢抗著。以下、『論語』の訳は同書による。

「後生畏る可し」の出典として著名。四十歳五十歳になっても世に名が現れないような者は畏るるに足らないという意味であるが、孔子の時代（紀元前六～五世紀）より七百年も後の『三国志』の時代、そこに登場する人物で没年齢が記されている者の平均没年齢は約五十歳であり、多くは三十代四十代で亡くなっている。従って、孔子の時代が『三国志』の時代よりも長命であったとは考えられず、とすれば四十歳五十歳という年齢は当時の人間の寿命の限界であり、その年齢で有名になっていなければ畏るるに足らないと言うのではナンセンスである。従って、この四十歳五十歳という表記は二倍年暦によるものと考えざるを得ず、一倍年暦の二十歳二十五歳に相当する。これならば、名を為すに当時としてはリーズナブルな年齢であろう。

「子曰く、善人邦を爲むること百年ならば、亦以て残に勝ち殺を去る可しと。誠なるかな是の言や。」（『論語』子路第十三）

善人でも邦を治めることが百年にもなれば、民を教化して残忍性や死刑を必要とするような大罪を犯すことを無くすることができる、という。この百年も二倍年暦であろう。従来、この百年を複数の善人が相次いで治めると解釈されてきたようだが、一倍年暦で理解する限り、このような原文にない解釈を導入するしかない。しかし、二倍年暦の百年であれば、一倍年暦の五十年に相当し、先に紹介した『列子』で示された人間の寿命に対応している。

このように『論語』においても二倍年暦でなければ理解困難な記事が存在する。こうした史料事実は孔子の時代が二倍年暦であったことを示唆する。孔子の前の『管子』、後の『列子』が共に二倍年暦で記述されているのであるから、その間に位置する『論語』が二倍年暦であることは当然とも言えよう。そうすると『論語』中、次の最も著名な一節をも二倍年暦として理解されなければならない。

「子曰く、吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順う。七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず。」（『論語』爲政第二）

最晩年の孔子が自らの生涯を語ったこの一節は、古来より聖人孔子の深き思想形成の過程を述べたものとして理解され、人口に膾炙してきた。たとえば次のようだ。

「【通釈】孔子言う、私は十五歳ごろから先王の教え、礼楽の学問をしようと決心した。三十歳にしてその礼楽の学問について独自の見識が確立した。四十歳ごろで事理に明らかになって、物事に惑うことがなくなった。五十歳になって、天が自分に命じ与えたものが何であるかを覚り、また、世の中には天運の存するということを知ることができた。六十歳ころは、何を聞いても皆すらすらと分かるようになったし、世間の毀誉褒貶にも心が動かなくなった。七十歳になっては、心の欲するままに行うことが、いつでも道徳の規準に合って、道理に違うことがなくなって、真の自由を楽しめるようになったようだ。」（同前）

しかし、ひとたび二倍年暦という概念を当てはめることにより、従来の孔子象は一変する。まず、「十有五にして学に志す」であるが、これでは遅すぎる。三十歳から四十歳代で多くは没していたと思われる当時の人間の寿命から考えれば、もっと早くから学問を志したはずである。これを半分の七～八歳頃とすれば、学を志すに適切な年齢であろう。はるかに寿命が延びた現在の日本でも、七歳で義務教育が開始されるではないか。その頃が就学開始適正年齢だからだ。

「三十にして立つ」も同様だ。「立つ」の意味については諸説存するが、一般的に考えれば、就学が終われば次は就職ではあるまいか。立身出世の「立」だ。日本でも過去多くの人が中学を卒業して十五～六歳で社会に出て就職した。従って、これも半分の十五歳のことと理解すればリーズナブルである。

「四十にして惑はず」も、実社会において学問が実体験に裏づけられ、二十歳にもなれば自信もついて惑わなくなったということであろう。
そして、「五十にして天命を知る」。すなわち当時の人間にとって人生の折り返し点でもある二十五歳で天職を得て、自らの進むべき道を決めるのである。孔子はこれを天命として受け入れたのだ。
「六十にして耳順う」とは、当時としては三十歳は年齢的にもリーダーシップをとる世代だ。従って、様々な意見や事物を冷静に判断、理解できる年齢であり、それを「耳順」と表現したのではあるまいか。この六十歳がもし一倍年暦であれば、当時の殆どの人が鬼籍に入っている年齢であり、当時としては珍しいほど長生きしてようやく耳に順うようでは、やはり遅すぎるのであり、何の自慢話にもならないであろう。
「七十にして心の欲する所に従へども、矩を踰えず」。これも二倍年暦として理解すれば三十五歳のことであり、まさに円熟した年齢と言えよう。従って、矩を越えないのだ。
以上のように、二倍年暦という視点から捉え直すことにより、わたしたちは等身大の生々しい人間としての孔子を発見することができるのである。従来のように殊更に聖人君子としての過大評価された孔子ではなく、生身の人間として孔子を見つめたとき、『論語』中に数多く見える、喜び、嘆き、怒り、慟哭する孔子の言動が無理なく理解できる。『論語』を二倍年暦で読み直すことこそ、真の孔子理解への道なのである（注２）。

『礼記』の二倍年暦

孔子が二倍年暦により述べた自らの生涯と類似する表現が『礼記』に見える。

「人生まれて十年なるを幼といい、学ぶ。二十を弱といい、冠す（元服）。三十を壮といい、室有り（妻帯する）。四十を強といい、仕う。五十を艾（白髪になってくる）といい、官政に服す（重職に就く）。六十を耆（長年）といい、指使す（さしずして人にやらせる）。七十を老といい、伝う（子に地位を譲る）。八十・九十を耄（老衰）という。七年なるを悼といい、悼と耄とは罪ありといえども刑を加えず。百年を期といい、?わる。」『礼記』曲礼上篇。（『四書五経』平凡社東洋文庫、竹内照夫著）

おそらくは貴族やエリートの人生の、十年ごとの名称と解説がなされたものだが、百歳まであることからこれもまた二倍年暦であることがわかる。『礼記』は漢代に成立しているが（注３）、前代の周、あるいはそれ以前の遺制（二倍年暦、短里）が、その中に散見されるのは当然であろう。
この『礼記』の記事と『論語』の孔子の生涯を比較すると、まず目に付くのが「学」の年齢差であろう。『礼記』では十歳（一倍年暦では五歳）だが、『論語』では十五歳（一倍年暦では七～八歳）であった。ということは、孔子は恐らく家が貧しくて学問を始める年齢が遅かったのではあるまいか。とすれば、先の『論語』の一節は、孔子の自慢話ではなく苦労話ではなかったか。わたしにはそのように思われるのである。
『礼記』の次の記事も二倍年暦の例だ。

「夫婦の礼は、ただ七十に及べば同じく蔵じて間なし。故に妾は老ゆといえども、年いまだ五十に満たざれば必ず五日の御に与る。（夫婦の間柄は、七十歳になると男女とも閉蔵して通じなくなる。だから〔妻は高齢になっても〕妾はまだ五十前ならば、五日ごとの御〔相手〕に入るべきである）」『礼記』内則篇。（同前）
これも説明を要さないであろう。やはり二倍年暦である。

顔淵（回）の没年齢

孔子が「後生畏るべし」と評した最愛の弟子、顔淵（名は回、字は子淵）は若くして没した。そのとき、孔子は「天はわたしを滅ぼした」と嘆き、激しく「慟哭」したという。

「顔淵死す。子曰く、噫、天予を喪ぼせり、天予を喪ぼせりと。」（『論語』先進第十一）
「顔淵死す。子、之を哭して慟す。従者曰く、子慟せりと。曰く、慟する有るか。夫の人の爲に慟するに非ずして、誰が爲にかせんと。」（同前）

哭とは死者を愛惜して大声で泣くこと。慟とは哭より一層悲しみ嘆く状態という。孔子を慟哭させた顔淵は、『論語』によれば短命であったとされる。

「哀公問ふ、弟子孰か學を好むと爲すかと。孔子對へて曰く、顔回なる者有り。學を好む。怒を遷さず、過を貳せず。不幸短命にして死せり。今や則ち亡し。未だ學を好む者を聞かざるなりと。」（『論語』雍也第六）

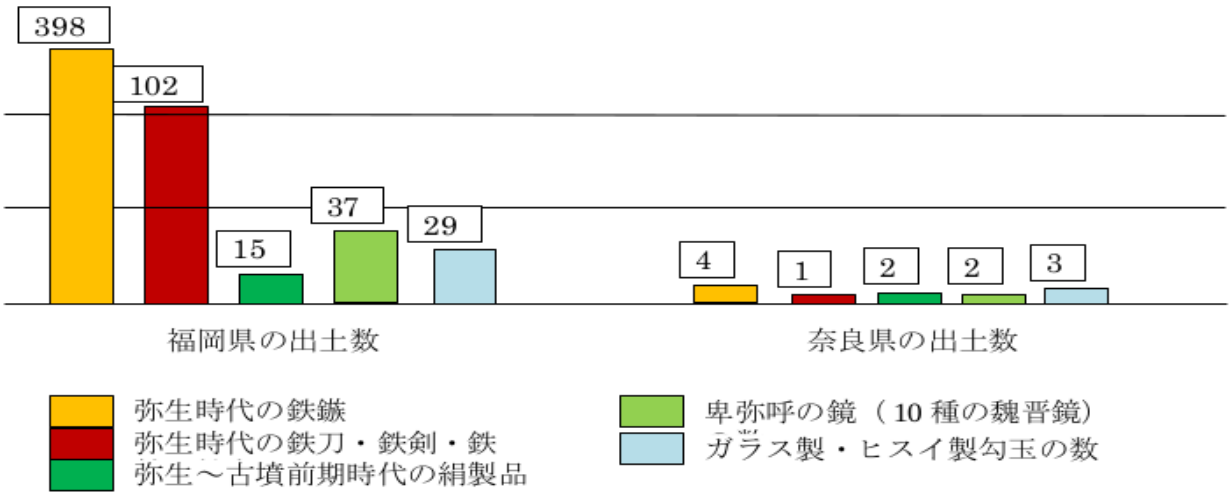
『論語』には顔淵も孔子も、その没年齢は記されていないが、孔子七二歳の時、顔淵は四二歳で没したとする説が有力なようである（孔子の没年齢は七四歳とされる）。もし、この年齢が正しいとすれば、それはやはり二倍年暦と見なさなければならない。何故なら、顔淵の没年齢が一倍年暦の四二歳であれば、それは当時の平均的な寿命であり、「不幸短命」とは言い難いからだ。従って、顔淵は二一歳で没し、その時孔子は三六歳ということになる。これであれば「不幸短命」と孔子が述べた通りである。『論語』は二倍年暦で読まなければ、こうした説話の一つひとつさえもが正確に理解できないのである。

周王朝の二倍年暦

周代に成立した文献、就中『論語』は二倍年暦で読まなければならないことを縷々述べてきた。しかし、事はそれら古典だけには留まらないようである。たとえば、周王朝の歴代天子のやたらに長い在位年数も二倍年暦ではないかという問題さえも惹起されるのである。
○成王（前一一一五～一〇七九）在位三七年
○昭王（前一〇五二～一〇〇二）在位五一年
○穆王（前一〇〇一～　九四七）在位五五年

〇厂萬*王（前　八七八～　八二八）在位五一年
〇宣王（前　八二七～　七八二）在位四六年
〇平王（前　七七〇～　七二〇）在位五一年
〇敬王（前　五一九～　四七六）在位四四年
〇顯王（前　三六八～　三二一）在位四八年
〇赧王（前　三一四～　二五六）在位五九年
※『東方年表』平楽寺書店、藤島達朗・野上俊静編による。

このように周代の天子が二倍年暦で編年されているとすれば、その実年代は軒並み新しくなり、中国古代史の編年は夏・殷・周において地滑り的に変動する可能性が大きい。あまりにも、重大かつ深刻なテーマだ。今後の研究課題としたい。

さい、次回からはいよいよ西洋古典の史料批判へと向かう。そこにおいて読者は、ソクラテス・プラトン・アリストテレス等による二倍年暦の世界を見ることができるであろう。
（続く）
（注）
1.新釈漢文大系『列子』（明治書院、小林信昭著）の解説による。
2.数ある孔子伝の中でも、古代人としての孔子の実像に迫った好著に白川静『孔子伝』（中央公論社）がある。
3.『周礼』のみは周代の成立。
（補論）
四書五経の一つ、『春秋』は孔子の作とも偽作ともされてきたが、同書は基本的に一倍年暦で著述されており、その点からすれば孔子よりも後代の作と見なしうるかもしれない。しかしながら、二倍年暦と一倍年暦が併用されていた時期も想定できるし、あるいは年代は一倍年暦で著述し、人間の年齢表記のみは二倍年暦が使用されていた可能性も否定できないように思われる。従って、後者の場合は「二倍年齢」と呼ぶ方がその概念上適切な命名であろう。この点、本連載においても今後留意していきたい。

②福岡県と奈良県の出土遺物比較・・邪馬台国畿内説徹底批判「勉誠出版:安本美典」